

俳句をつくるという意味

山形県現代俳句協会事務局長 佐竹伸一

直観と眼のはたらきによって俳句はつくられる。直観と眼のはたらき方には、高低や深浅や強弱や鋭鈍があり、柔らかさと固さ、豊かさと貧しさがある。それぞれ前者を目指すとなれば俳句は難しく、後者でよしとすれば俳句はやさしい。

俳句は日常の一瞬を十七音で切り取る詩である。人生には山あり谷ありで波乱の時が少なからずあるとは言え、日々の暮らしが概ね只事の連続であり、平凡な宮みが繰り返されると言つてよい。こうした日々の只事を、鈍い直観と浅薄な眼で句にすれば、正真正銘のつまらない只事俳句ができあがる。一方、只事のようなあるいは只事に見える日々の暮らしや風土とは言え、鋭い洞察力と高い精神性があれば、只事の中には無限の詩が隠されていると言つてよいだろう。

確かに、俳句を含め全ての表現は、順風満帆な時よりも、悲しい時や取り戻せない欠落がある時にこそ必要とされ、そのような時には人の心を打つ佳句は生まれやすい。しかし、人はいつまでも悲しみを追いかけてはいけない。悲しみを乗り越えて、日常をより良く生きていかなければならない。人は多少の差こそあれ、誰もが悲しみを背負いながら生きている。前を向き気高く生きる日々の暮らしは、一見只事のよう

に見えて、実は只事の世界ではないのである。

私は学生時代から地質学を学んできた。見ることと見えることの違いを教えてくださった恩師は、露頭（地層）を見抜く知見がなければ、それらは何も語ってはくれないから様々の観点から考察するのだと話されていた。このことは、俳句にも当てはまる。表面には現れてこない奥底に隠れたものを

山形県現代俳句協会会報

第33号
令和7年12月

現代俳句の秀句を読む 10

雪降れり時間の束の降る」とく

石田波郷

見抜く眼力がなければ、対象の本質は見えないままなのである。同様に直観とは、知見であり経験であり学識であり、日々の研鑽があつてこそはたらくものであると理解してよいだろ。また、この直観というものは、単に俳句のみを学べば深くなるというものではなく、様々なジャンルへの造詣の深さを根幹としてより確かになると言つてよいだろう。

しかし、こうした俳句の直観や眼のはたらきは、学ぶことだけで身に付くものではないのだろうか。俳人の俳は人に非ずと書く。自分に非ずとは、自分以外のものに変わるということである。これは自分以外のものの気持ちがわかるということ。つまり、人としてのやさしさがあつて自然と備わるものではないのだろうか。俳句は、眼前を直覚し「いま」「ここ」に「われ」を置く詩であるが、この「われ」とは自我に凝り固まつた「われ」ではなく、身の回りの自然や人々に心を寄せる「大愛」をもつた「われ」だと思つていい。

読み手の心を震わすような句を作りたいという人がいる一方で、単に句作を楽しめればそれでよいのだという人や、句会後の懇親の場が楽しみでという方も少なくはないだろう。俳句に求めるものは人様々。いろいろな俳句やいろいろな楽しみ方があってよいし、その方がむしろ自然である。しかし、たかが俳句されど俳句である。俳句を志した以上、後世まで人口に膾炙するような句を、一生の中に一句ぐらいはものにしたいと願うのである。

俳句をつくるとは、日常の流れの中で曖昧になつて見失いがちな自分を取り戻しクリアにしていくことでもある。俳句に支えながら日々を乗り越えて行こうとする意志とも言えるだろう。山形の大地に根を張り、この地に生きている生かされている魂の叫びを十七音で詠い続けていきたい。

「雪が降る」でも「雪降るや」でもなく「雪降れり」という叙情的な措辞と「時間の束」が激しく降る雪のスピードや雪の量を彷彿させる。雪という物理的な現象を通じて、形の無い時間を可視化しつ一つの雪片が過ぎ去つていく一瞬一瞬の象徴のように感じられる。

昭和四十三年に刊行された第七句集『酒中花』の中の一句。五十六歳で亡くなる二年前の入院中の作である。雪に託された掲句の時間は生への希求でもあります命の持ち時間だったのかかもしれない。

（松田佳津江）

県現代俳句協会吟行会

◇令和七年十一月八日（土）

本山慈恩寺・慈恩寺テラス
寒河江市ハートフルセンター

現代俳句協会中村和弘特別顧問をお迎えし、十
名が参加。小春日の中充実した時間を過ごした。

1 ③慈恩寺の手水に冬の始めかな	大類つとむ	瀬野 史
2 ④野ぶどうの坂道とろとろ山門へ	堀 尚子	堀 尚子
3 ③仁王坂怒髪を天に葱畑	高橋 エミ	高橋 エミ
4 ③枯菊の枯れきるまでを支へ合ふ	松田佳津江	松田佳津江
5 ②刈田奥雁戸山双耳は風の道	井上 康子	井上 康子
6 ②ふと笑ふ十二神将冬うらら	佐竹伸一	佐竹伸一
7 初冬の光こぼれて仁王坂	松浦廣江	松浦廣江
8 尻太き擦れ違ひ行く秋茜	中村 和弘	中村 和弘
9 ⑤金色の波麗羅の目有り冬の闇	阿部 雅子	阿部 雅子
10 ①御山雪です佛の里の熊注意	畠山カツ子	畠山カツ子
11 ③冬木の芽あれこれ見分け仁王坂	阿部 雅子	阿部 雅子
12 ④黄落に向く端つこの仏たち	瀬野 史	瀬野 史
13 ②朱唇なまめく弥勒菩薩や梅もじき	堀 尚子	堀 尚子
14 ①慈恩寺や鐘つく人と冬の蝶	松田佳津江	松田佳津江
15 ①十二神将熊出没に槍を向け	井上 康子	井上 康子
16 ⑨冬近し仁王の脛の脈荒し	高橋 エミ	高橋 エミ
17 ①菊揺れて持国多聞の黒光	佐竹伸一	佐竹伸一
18 落葉踏み十二神將に会ひに行く	井上 康子	井上 康子
19 晩秋も本性を絶ち林鐘を打つ	松浦廣江	松浦廣江

20 ①立錐の切株白し冬に入る

中村 和弘

畠山カツ子

21 ①澆刺と十二神将冬陽中

阿部 雅子

22 よみがえる令和の茅葺き冬の寺

中村 和弘

23 ⑤秋雲のゆく慈恩寺の案内図

阿部 雅子

24 宝輪と競う杉の秀秋の空

瀬野 史

25 ②薬師如来紅花色の唇を持つ

堀 尚子

26 ③いつ來ても落葉湿りの薬師堂

松田佳津江

27 ①鐘声や風鐸の搖れ秋うらら

高橋 エミ

28 ②薄明り集う光背冬に入る

井上 康子

29 吟行会熊よ穴へと願ひつつ

松浦廣江

30 ②立冬や母に捧げる香一本

中村 和弘

31 ③冬キヤベツ隆々として慈恩かな

畠山カツ子

32 ①初冬の陽浴びて和やか御前仏

阿部 雅子

33 姫子松ふんだんに生かす冬秘仏

阿部 雅子

34 ①御山雪です佛の里の熊注意

中村 和弘

35 ③冬木の芽あれこれ見分け仁王坂

阿部 雅子

36 ④黄落に向く端つこの仏たち

瀬野 史

37 ②朱唇なまめく弥勒菩薩や梅もじき

堀 尚子

38 ①慈恩寺や鐘つく人と冬の蝶

松田佳津江

39 ①十二神将熊出没に槍を向け

井上 康子

40 ⑨冬近し仁王の脛の脈荒し

高橋 エミ

41 ①菊揺れて持国多聞の黒光

佐竹伸一

42 落葉踏み十二神將に会ひに行く

井上 康子

43 晩秋も本性を絶ち林鐘を打つ

松浦廣江

44 ①立錐の切株白し冬に入る

中村 和弘

【中村和弘特別顧問の講評から】

◇吟行会での作句について

* 不完全でもよいから、

吟行の場で五七五に

まとめ記録すること。

後から作ろうと思つても
作れなくなる。

◇句作全般について

* 自分の好きなもの。例えば歳時記の動物、植物等々、誰にも負けない領域を持つこと。

* 今を詠むことが一番強い。

今しか詠めない句がある。今日の投句の中に熊を詠んだ句があつたが、熊の出没が相次いでいる今年だからこそ作れる句である。そういう句が一番強い。今しか詠めない句に挑戦してほしい。

* 沢山詠んで自信をつけること。

* 物をよく見ること。

例えば、十二神将とひとまとめにせず、一つの仏像をよく見ること。十二神将の中で、

自分はどの神将が好きなのかを考え選び出し作句すること。

一句のどこに重点があるのかを、はつきりさせること。

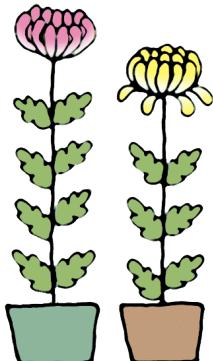
* 避けるべきこと

・ つき過ぎ・類想・当たり前・散文的



【吟行会に参加して】

高橋エミ



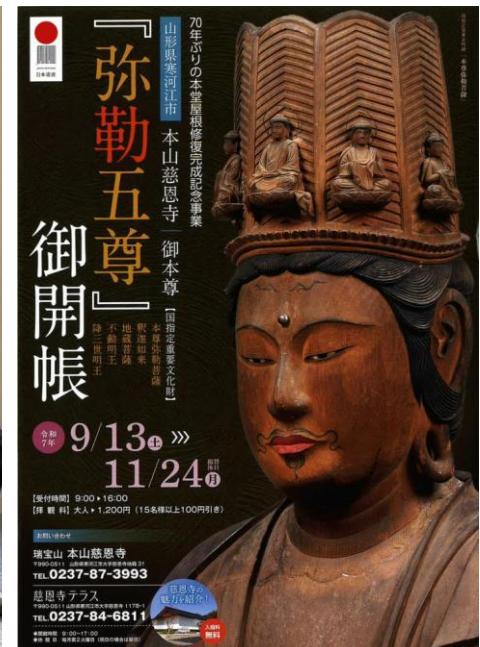
十一月八日、中村和弘先生をお迎えしての吟行会に参加。今年入会したばかりの私には初対面の方々が多く緊張の吟行会。雁戸山には仁王坂からと村山市からでは山容の違いが面白い。

仁王坂下からのゆつたりした話し声が吟行会の雰囲気。新しく葺き替えた本堂の大屋根。御開帳の秘仏達。薬師堂の十二神将の迫力。思い切り鐘を撞いた鐘楼。茅葺屋根に生えた雑草。花の終わった彼岸花の葉の緑。それ等をどう詠むか悶々としているうちに三句出しの句会が始まること。一句一句に中村先生の丁寧な講評。「近すぎ」「十二神将を一まとめてしない」。出没盛んな熊を詠んだ句もあり「今、起きている事を詠んだ句は強い」等々。具体的な講評は飽きる事なく瞬く間に時間が過ぎる。

庄内の皆さん。遠い所お疲れ様でした。楽しい出会いを「もつけだの！」



撮影前、大類会長に急用が出て全員揃わず。10名での記念撮影。



70年ぶりの御開帳に合わせ、
本山慈恩寺で吟行を行いました。



見ごろの紅葉と鐘楼。時々鐘の音が聞こえました。一人3回撞いてよいそうです。



慈恩寺での吟行を終え、慈恩寺テラスで昼食。
その後、寒河江ハートフルセンターに移動しました。
写真は、締切の時間が迫り、必死で句帳とにらめっこしていた時のもの。吟行会ならではのこの緊張感がたまりません。しっかり充電できた一日でした。

会・員・近・詠

吟行会に参加できなかつた方から
作品を寄せていただきました。



- 1 新涼や自分のための一旬得て うにがわえりも
2月光を吸うて橡の実まるまると リ
3 橡の実はづませ地球は上機嫌 リ
4 檜扇の実黒き光沢つぶらなり リ
5 人居や玄関の花は桜蓼 リ
6 弟に父の背を見て秋深し リ
7 青空のてるてる坊主秋の朝 大泉秀明
8 雲間より光を集め芋煮会 リ
9 十月やイベント続き警備立つ 大志田雄志
10 彼岸花消えて此岸にただひとり リ
11 老いてゆくことのみ確か秋の声 リ
12 良書より悪書が好きで天高し リ
13 犬小屋を遠巻きにせし蟻の道 柏崎青波
14 秋日和舐めてとがらす木綿糸 リ
15 プラム酒より薄き血潮で恋をする 木嶋玲子
16 コンバインパワー全開豊の秋 リ
17 境内のラジオ体操小鳥来る リ
18 人生の加減乗除や後の月 リ

リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ

原稿募集
卷頭や「現代俳句の秀句を読む」等に、
掲載を希望される方がおられました
ら、事務局までご連絡ください。

- 19 丈も幅も立派な秋刀魚皿おどる 黒谷博樂子
20 新米の瑞穂の国に古米食う リ
21 ぐいぐいとギア換えとんぼ草の上 リ
22 月山に大きな雲や昼の虫 小林政女
23 倒壊の家に朝顔咲きほこる リ
24 林業のウルトラ重機鰐雲 リ
25 秋めくやカレーうどんの具はうどん 滝口然
26 秋の日を大きく返しビート板 リ
27 舌出してなおほえつかざる冬の犬 リ
28 寺までの山路装うや初紅葉 東海林光代
29 創造のちから直球で来る秋の展 リ
30 ノーベル賞受賞の言葉の重さ秋闌けるリ
31 柄の失せし鍋捨てられず昼の虫 津田よね子
32 焼き林檎ほどよく焼けし三時かな リ
33 象潟や九十九島は初時雨 リ
34 白露や境内の小石みな佛 渡辺竹女
35 紺碧の宙そらに涼しき三重の塔 リ
36 法の灯の百の揺らぎやちちら鳴く リ

会報33号 令和七年十二月発行
事務局 発行人 大類つとむ
発行所 山形県現代俳句協会
〒九九七・四二二七
尾花沢市中町五一一〇
〒九九〇一五五二
朝日町常盤に五二一
佐竹伸一

編集後記

◇木から造られる物は多々あるが仏になる木は特別である。造る技術も人材もその木に引き寄せられるようであった。手が勝手に動くように見えたものだつた。だからこそ心が洗われ、自然に手を合わせるのかもしない。

松浦廣江

◇本山慈恩寺での吟行会。風はあつたもの、小春日の温かな日差しに恵まれ穏やかな時を過ごした。初めての方と久しぶりの方もおられたが、皆旧知の仲のように睦まじく笑顔溢れる吟行となつた。ご指導くださつた中村和弘先生と、お心遣いを寄せてくださつた監事の柏崎青波様に、心より感謝申し上げます。
◇今年も残り少なくなりました。俳句を通して会員の皆様と繋がつていると思うと、何かあたたかい気持ちになります。実際に顔を合わせて句会をすれば一層楽しいと思ひます。できるだけ多くの方に参加して頂けたら嬉しいです。

堀 尚子